
コードギアス 反逆のルルーシュ ~ 銀の翼 ~

じゅげむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス 反逆のルルーシュ Ⅰ 銀の翼Ⅰ

【Nコード】

N1377Z

【作者名】

じゅげむ

【あらすじ】

神聖ブリタニア帝国の植民地となった旧日本・エリア11。そこで極秘裏に行われていた実験。しかしある日、C.C.の入ったカプセルが盗まれると同時に、その極秘研究所から脱走した2人の少年レイと少女ジル。彼らはいったい何者なのか・・・？そして彼らが関わる世界の行方は？コードギアスのもう一つの物語。

STAGE 00 【プロローグ】

【旧日本・エリア11・極秘研究所】

「くっ……！！例のカプセルが奪われたっ！！急げっ！！なんと
しても取り返すんだっ！！」

研究所内ではけたたましいアラーム音と、それに負けじと声を張り
上げる軍人の姿があった。

彼の名はバトレー。

神聖ブリタニア帝国第3皇子クロヴィスの命で、こここの管理、隠蔽
をしている将軍であり科学者でもある。

「……殿下にお伝えせねば……………」

バトレーの顔には焦りの色が浮かんでおり、その事態の深刻さがう
かがわれる。

そうして彼は踵を返し、その研究所を後にしようとした。
しかし突如奥の一室が爆発した。
驚いて彼は振り返った。

「なっ・・・！！まさかつ・・・！！」

バトレーの顔の焦りは瞬く間に恐怖へと変わる。

そしてその爆発音を聞きつけた十数人ほどの兵士が銃を構えて駆けつけた。

するとその爆煙から姿を現したのは、銀髪で綺麗なアメジスト色の瞳をしている全裸の2人の少女と少年だった。

しかし目はどこか虚ろで、まるで心がない人形のようなだった。

「ああ・・・そんな・・・まだ不完全だと言うのに・・・」

バトレーは絶望的な声を出して思わず後ずさった。

その様子を見た兵士たちは、あの2人がどんな人間かはわからなかったが、相当まずいものだということとは理解できた。

すると突然彼らは何かにとりつかれたように、床に落ちていた鋭いガラス片をひっつかみ、兵士たちにむけて走り出した。

「うつ！！うつ！！うつえっ！！」

バトレーはそう命令すると、いちもくさんに走ってその場を立ち去

る。

目の前の2人に無我夢中で発砲する兵士はそれに気がつかない。しかも2人はその銃弾に当たっても何事もないようにこちらに突っ込んでくる。

「なっ！！なんで死なないんだああっっ！！！！！」

その光景に兵士たちは恐れを抱き、後ずさりをしながらさらに発砲を加える。

そして2人は彼らの元へ行き着くと、次から次へと手に持った鋭利なガラス片で彼らの喉元を掻き切っていく。

「やっ！！やめてくっ・・・があ！！！」

その場で何度も悲鳴があつた。

数分後、いつの間にか辺りは血の海と化し、兵士は皆息絶えていた。そして2人は何事もなかったかのようにその場を後にした。

S T A G E 0 1 【名もなき少女】（前書き）

誤字・脱字の指摘お願いします。

STAGE 01 【名もなき少女】

【トウキョウ租界 アシユフォード学園】

「はぁ・・・はぁ・・・」

一人の少女が所々血に染まった白衣のみをまとって走っていた。

彼女は銀色の髪をなびかせ、何度も後ろを振り返り、まるで何かから逃げているようだ。

とにかく遠くへ・・・

その考えだけが今の彼女を突き動かしていた。

しかしそんな彼女を突如めまいと頭痛が襲い、その場で思わず立ち止まり嘔吐し、そのまま彼女は倒れ込んでしまった。

視界が霞み、意識が遠のいていく・・・

そうして彼女は意識を失った。

数時間後・・・

「ん・・・ん・・・」

彼女がゆっくりと目を開けると、そこは見知らぬ天井だった。

辺りを見渡すが、ここがどこかさっぱりわからない。

部屋は質素で、きちんと物が整理整頓されている。

クローゼットに掛かっている服からすると、どうやらここは男性の部屋のようだ。

そして彼女はベッドから起きあがると、窓辺へと歩み寄り、そこから外を眺めると、学生らしき人たちが楽しそうに話しながら歩いていた。

すると突然その部屋のドアが開いた。

「ちよっ！！あなたそんな格好でっ！！」

「えっ・・・？」

自分の体を見ると、なぜか全裸だったが、彼女は全く気にしている

様子はなかった。

あわてて彼女に駆け寄る金髪の女性・ミレイ・アシュフォードは、部屋のカーテンを閉めた。

彼女の手にはバスローブがあり、どうやらこれを取りに行っていたらしい。

「ダメじゃない！まだ安静にしてくちゃ！」

「あつ・・・はい・・・ここはどこですか？」

自分にバスローブを着せて、強引にベットまでひっぱり寝かしつけるミレイに、彼女は訪ねた。

「ここはアシュフォード学園のクラブハウスよ・・・あなた名前は？どこからきたの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

思わず彼女は考え込んだ。

なぜかうまく思い出せない・・・
いったい自分は何なのだろうか？

「名前は・・・ジル・・・・・・・・でもそれ以外は思い出せないんで

す……」

「もしかして記憶喪失？」

「たぶん……」

「そう……ファミリーネームは？」

「……わかりません……」

「そっかぁ……あつ、ちなみに私はミレイ・アシュフォード！この学園の生徒会長兼理事長の孫娘！よろしくっ！」

ミレイは明るい笑顔をジルに向けながら言った。
どうしてこんな自分をここまで世話してくれるのか彼女は不思議だったが、それをきくのは何故か失礼のような気がしたので、きくのはやめた。

「あの……私はどうしてここへ？」

「あなたはね、血だらけの白衣だけを着て学園の庭に倒れていたのよ？あなたに怪我はないようだけど……覚えてない？」

「いえ・・・全然・・・」

怪我がないのに血まみれ？

じゃあ自分はだれかを殺してしまったのか？

そんな考えがジルの脳裏によぎる。

もしそうだとしたらこんなところにはいられない。

このミレイという人にも迷惑をかけてしまう・・・

そして彼女はここから立ち去る旨を伝えようとすると、それより先にミレイが口を開いた。

「心配しなくても大丈夫よ・・・一応警察には届け出たし、確認も取ったからあなたが犯罪に関わっていたという事実もないわ」

ミレイは優しい声で、彼女の頭を撫でながら言った。

ジルはそれを聞いて安心した。

その様子を見たミレイは、突然話を切り出した。

「ジル、あなた行くところがないならどう？ここに住んで学校に通わない？どうせ身元引き受け人も必要だし、御爺様にも話はしておくから」

「いや・・・私は・・・その・・・ミレイさんやこの学校の人たちにも迷惑がかかってしまうかもしれないし・・・」

「いいのよ！そんなこと気にしなくて！あなたは悪い人には見えな
いしねっ？」

そういつてミレイはウィンクを飛ばす。

正直ジルは戸惑っていた。

自分がいることで、ミレイや、この学園の人たちに迷惑がかかるか
もしれない。

だがここを出たからといって行く当てもなく、記憶もないためどう
したらいいかわからない。

そんなことを悩んでいると、それを察したようにミレイは言う。

「あなたの記憶が戻るまでここにいればいいし、もしあなたが望む
なら、記憶が戻った後もここに居ていいのよ？」

彼女はベットに腰掛けてたジルの隣に座りながら肩を軽く叩く。
こんな優しい人に拾ってもらって良かったと彼女は思いながら、「
はい」と少し笑って返事をした。

「よろしいっ！じゃあ今からどうする？もう一眠りしてもいいわよ
？」

ミレイは満足そうに大きくうなずくと、そう提案した。

「いえ、もう大丈夫ですし・・・それに動いてた方が今は気がまぎれますんで・・・」

「そうね・・・それなら一緒に今から生徒会のみんなに会いに行かない？丁度一人を除いてみんなクラブハウスにいるし、私も付きつきりって訳にもいかないから、勝手がわからないあなたのお世話も頼めるしねっ？」

「そんなっ！皆さんに迷惑ですし・・・」

「いいのいいの！会長命令だから！」

そういつてミレイはいたずらっぽく笑った。

そしてジルは「(きつとみんなこの人で大変な思いをしてるんだろうなあ)」と思うのであった。

そんな中突然部屋の扉が開いた。

「あの・・・ミレイさん・・・先ほどの女性の方の具合はどうですか？」

「さっき目を覚ましたところよ、ナナリー」

それを聞いたナナリーは「そうですか」と言って、車椅子を部屋の中へ進めた。

「あなたは・・・？」

ジルが首を傾げてたずねる。

「私はナナリー・ランペルージです、よろしくお願いしますね？」

「・・・私はジル・・・よろしく」

「はい！ところで兄のベットで良かったのですか？私のベットの方が・・・」

「いいの！いいの！ナナリーは気にしない！」

ミレイはなにやらニヤニヤしていたが、ジルとナナリーがそれに気がつくことはなかった。

そしてジルはナナリーの特別な雰囲気を感じ、たずねようか迷ったが、後々に何か不都合があってはいけないので、思い切ってきてみた。

「あの・・・ナナリー・・・あなたは・・・」

「はい・・・私は目と足が不自由なんです・・・」

ナナリーは、ジルがたずね終える前にそれを打ち明けた。
そんな彼女の表情はやはり暗く、悲しい物だった。

「そう・・・私にできることならいくらでも手伝うから、よかったら頼ってね？」

ジルは笑顔でナナリーにそう言ってしまい、自分らしくないなと思ったが、記憶がなく、自分を知らないのに、そんな風に感じたことが不思議だったが、嬉しそうに「はい！」と笑顔でうなずく彼女を見て悪い気はしなかった。

そしてそんな中ミレイが突然話に割り込んできた。

「そうよナナリー、ジルも今日からここに住むんだから」

「「えっ!?!」」

思わずナナリーとジルがハモる。

「ナナリーもルルーシュ以外に誰かいた方が楽しいでしょ？」

「それは・・・そうですね・・・」

「部屋はもう一つあるし、ルルーシュには私から説明しておくわ、それに彼女は記憶喪失で行くあてがないのよ」

「記憶喪失・・・？そうなんですか・・・あの、こんな私なんで迷惑がかかると思いますが、よろしく願いしますね？」

「えっ・・・？あつ、よろしく願いします・・・」

勝手に進んでいく話を止めるすべはなく、ジルは少し困ったが、別に不満なことはなく、むしろありがたかったので、その提案を受けらることにした。

「じゃあ今から生徒会室に行くけど、ナナリーは？」

「そうですね・・・特に用事もないので一緒に一緒にします」

「なら決定っ！生徒会室にレッツ・ゴー！ー！ー！」

「じゃあナナリーの車椅子は私が押すね？」

「あつ、はい、お願いします」

なぜかハイテンションなミレイを先頭にして、ジルはナナリーと車椅子を押しながら部屋を出た。

そしてその夜にルルーシュがベットで寝ようとする、なぜか良い匂いがしてなかなか寝付けなかったというのはまた別の話・・・

【クラブハウス・生徒会室】

「ねえ・・・さっきの子、大丈夫かなあ？」

「シャーリー心配しすぎだって、怪我は別になかったんだろ？」

「うん・・・でも服は血だらけでまるで撃たれたみたいになくさん

穴が空いてたし・・・」

「そんな穴だらけになるほど撃たれてたらその子とくに死んでるって！」

「・・・そうだね」

ここはアシュフォード学園生徒会室。

その中でオレンジ色の髪の少女、シャーリーと、青い髪の少年、リヴァルが、数時間前に見つけた少女について話していた。

発見者はシャーリーで、その後、ミレイと一緒にルルーシュの部屋に（半ばミレイの嫌がらせで）運んだのだ。

ちなみにシャーリーはその時、ルルーシュの部屋に全裸で寝かせた少女を羨ましいとか思ったり、なにか興奮したりで、いろいろと悶々していたというどうでもいい情報も付け加えておこう。

一方リヴァルはルルーシュに置いてきぼりにあい、一人寂しくバイクを押していたのであった。

「でもその人危険じゃないの・・・？」

近くの別の机でパソコンのキーを叩いていた緑色の髪をしたメガネをかけた少女、ニーナが不安そうに2人にきいた。

「一応警察には届けたし、それにそんな事件は起こってないって言

「つてたから大丈夫だよ！」

「うん・・・」

シャーリーの言葉を聞いて安心したニーナはホッとした。そしてそんな時、部屋の扉が開き、ミレイが入ってきた。

「会長！あの子は！？」

「大丈夫よ、さっき目を覚まして今ここにいるわ・・・入ってきていいわよー？」

そういつてミレイが呼びかけ、一歩右に寄ると、その後からナナリーのと車椅子を押しながら、バスローブを着た銀髪のアメジスト色の瞳をした少女が入ってきた。それを見たりヴァルは「わぁお・・・」と言ってしばらく見とれていた。

「私、シャーリー・フェネット！水泳部兼生徒会役員！よろしくね！」

シャーリーはジルの元に駆け寄ってきて手を握りあいさつをした。

「あつ！オレはリヴァル・カルデモンド！書記ね！」

彼女に見とれていたリヴァルはハッ！としてあいさつをする。

「あつ・・・あの・・・ニーナ・アインシュタインっていいます・・・」

なぜか顔を真っ赤にしてもじもじしながら自己紹介をするニーナ。

「私は・・・ジル・・・」

急なことに戸惑いながらも自己紹介をする。
そしてそんな彼女をカバーするようにミレイが付け加える。

「あのね、彼女、記憶喪失なのよ」

「「「えっ!?!」」」

ミレイの発言に驚く3人。

「それでね、私ひとりじゃ彼女が困ってる時の手助けにも限界があるから、あなた達にもお願いしたいの」

「もちろんですよっ！」

「まかせてくださいっ会長!!」

「うん・・・」

「よっ、よろしく・・・」

快く引き受けてくれた3人に、ジルは頭を下げた。

「そーだっ!!彼女、ファーストネームはあるけど、ファミリーネームがないの・・・でもそれじゃなにかと不便もあるだろうから、みんなで決めようっ!!ってことでっ！」

そういつてミレイはジルと3人を座らせ、ナナリーの車椅子を机によせると、「今日の議題は、ジルちゃんのファミリーネームでえーっす!!」となにやら勝手に会議を始めた。

「じゃあ、だれかい案がある人っ！」

「はいっ！」

ミレイが発言を促すと、まずはシャーリーが手を挙げた。

「私は『バレンタイン』がいいと思いますっ！」

「つまり・・・ジル・バレンタイン・・・いやいやっ！それはいろんな意味でまずいでしょっ！？某ゲームをまるまるパクってるし！」

というわけで即却下。

そして次に名乗りを上げたのはリヴァル。

「オレは『ヴィルヌーヴ』が良いと思いますっ！」

「ジル・ヴィルヌーヴ・・・ってそれもいろいろまずいわよっ！F1のレーサーじゃないっ！！」

これも即刻却下。

そして次にニーナ。

「えっと・・・私は・・・」(あまりの内容に自主規制させていただきます)「」

「だめ！だめ！だめ！ぜーったいだめっ！！！」

いろいろとツツコミ疲れて呼吸が荒いミレイ。
そして最後にナナリー。

「そうですね・・・『フランゾワース』なんてのはどうでしょう？」

「いいわねっ！流石ナナリー！！どっかの３人とは大違い！」

ミレイに褒められたナナリーは嬉しそうに頬を赤らめる。

「あなたはどうかこれでいい？」

「はい、なんかお花の名前みたいですてきです」

「よしっ！なら決定！あなたの名前は今日から『ジル・フランゾワース』だっ！！」

満足そうにミレイはうなずいた。

そんな光景を見ていたジルは、なんだかおかしくなり笑い始めた。すると他のメンバーもそんな彼女につられて笑い出すのであった。

その夜・・・

ジルはナナリーと一緒に夕食を食べていた。

ルルーシュが今夜は遅くなるとシャリーに伝言していたので、先に食べることにしたのだ。

「へえ、あなたのお兄さんってそんな人なんだ」

「はい、料理なんかすごく上手なんですよ？」

そうして2人が談笑していると、部屋の扉が開いて、黒髪でアメジスト色の瞳の少年、ルルーシュが入ってきた。

「ただいまナナリー」

「おかえりなさいませ、お兄様」

ナナリーは彼を笑顔でむかえた。

そして彼も笑顔を返すが、どこか疲れて、思い詰めているようだった。

「あつ・・・あの・・・」

「大丈夫、会長から話は聞いてるよ・・・オレはルルーシュ・ランペルージ、よろしく」

「あつ、ジル・フランゾワです・・・よろしくお願いします・・・」

「ああ・・・じゃあオレは先にシャワーを浴びてくるから、ゆっくりしてくれ・・・」

そういつてルルーシュは部屋の奥へと消えていった。

ジルは何かを彼に感じ、その後ろ姿をしばらく見つめていた。

STAGE 01 【名もなき少女】（後書き）

ホントはもう少し書きたかったですね・・・

でもだらだら引きずってたらなんかめちゃくちゃになっちゃいそう
だったんで・・・w

てか途中からネタでしたね。

バイオハザードはどうしてもいれたかったんですよっ！

そうしたらもう・・・結果は見事に・・・w

次話はもう一人の少年のお話ですっ！！

どーぞお楽しみにっw

S T A G E 0 2 【悪魔の目覚め】（前書き）

誤字・脱字の指摘、よろしくおねがいします

STAGE 02 【悪魔の目覚め】

【特別派遣嚮導技術部・倉庫】

「ふんふんふんふんふん」

一台の大型車両の横で、どこか拍子ぬけた雰囲気のメガネをかけた男　ロイドは、鼻歌を口ずさみながら、上機嫌で目の前のパソコンのキーを淡々と叩き続ける。

彼はブリタニアの宰相であり、第二皇子シュナイゼルお抱えの特別派遣嚮導技術部、通称『特派』の主任研究員である。

そんな彼がなぜこんなにも上機嫌なのかというと、原因は彼の開発したKMF、ランスロットにあった。

この機体は、世界で唯一の第七世代型KMFであるのだが、あまりにハイスペックを追求したため、今までこれに乗るこなすデバイサーがいなかった。

しかし、先ほどのシンジユクでの事件の際に、素晴らしいデバイサー（パーツ）を見つけたのだ。

それは、枢木スザクという、イレブン、もとい名誉ブリタニア人だ

が、自身の自信作であるこの機体を乗りこなす人間なら、正直彼は誰でもよかったのだ。
そしてロイドはそんな中から得られた戦闘データを解析している最中なのだ。

ガラガラ・・・ガッシャーンッ！！！！

そんな中、突然倉庫の奥の方で大きな物音がした。
ロイドはその物音に驚き、ぶつぶつと文句を言いながらも、気になつて様子を見に行った。
するとそこには血だらけのボロボロの軍服だけをまとった少年が倒れていた。

「あああ！セシルくん～！！」

ロイドはまるで何か面白いおもちゃでも見つけたかのようにその少年を見ると、大声で倉庫に止まっていた大型車両の中にいる人間を呼んだ。

そして中から出てきたのは同じ特派の研究員兼ロイドのお守り役である女性 セシルである。

「はい！なんです、ロイドさん・・・ってキャアア～！！」

呼ばれたセシルがひょっこり顔を出すと、そこには少年が横たわっ

ており、思わず彼女は悲鳴をあげた。

「ちょ…大丈夫なんですかつ!？」

慌ててかけより、脈を計るセシル。
どうやら生きてはいるようだ。

「いつ!急いで医務室へ!!ロイドさんっ!!」

「へっ？」

「手伝ってくださいっ!」

「ええ…なんで僕が…」

「何かいいました？」

「い…いえ、なにも…」

めんどくさそうに言ったロイドにセシルが笑顔で脅す。
それを見た彼は、一瞬背後にこの世の思えないものが見えた気がした。

そして渋々ながら、ロイドは少年の両肩を、セシルは両足を持ち上げ、半ば引きずりながら、倉庫に設置された簡易的な医務室へと運ぶ。

「酷い・・・服にこんなにも穴が・・・きっと誰かに撃たれたんですね・・・」

「ええ、でも傷1つないよ？彼」

「えっ？」

ロイドが少年の着ている服をめくり上げて、内側の身体を見る。それを聞いたセシルも、ロイドの隣から覗き込む。

確かに、服にはたくさんの銃弾の跡と、大量の血液が付いているのにも関わらず、彼には一切の傷がない。

撃たれて死んだ誰かの服を着た、という考えもあるが・・・

「とにかく警察に・・・」

「あはあ、でもこの子、軍の制服を着てるんだから、こっちで軍のリストから洗った方が早いんじゃない？」

「あつ、確かに・・・じゃあさっそく調べてみます！それで、この

子は・・・？」

「まあ目が覚めるまでここに寝かせておけばいいよ」

「わかりました」

そういつてセシルはパソコンを取りに一度、車の中に戻った。
そしてロイドは興味深そうにその少年を見ていた。

2人の男が、木製の小舟に乗って海を漂っていた。

1人は甲冑を着た銀髪で、アメジスト色の瞳をした男。

彼の目はどこか虚ろで、遠くの何かを見つめているようだった

もう1人は、黒いマントに身を包み、フードを深くかぶっているため顔が見えず、男か女かも不明である。

辺りは濃い霧に包まれ、1m先すら視界がきかない。

しかし小舟は誰かが漕いでいるわけでもないのに、まるで目的地を知っているかのようにゆつくと進んでいる。

そしてしばらくすると大きな揺れが小舟を襲った。

どうやら浅瀬に乗り上げたようだ。

2人が小舟から降りると、脛の辺りまで足が海水に浸かった。

少し歩くと、小さな浜辺に辿り着き、その奥には森が生い茂っていた。

すると突然、銀髪の男の顔が怒りに歪んだ。

声は聞こえないが、彼はもう1人の方を振り返り、何かを怒鳴っている。

もう1人の口元は見えないが、会話をしているらしい。

彼は怒鳴るのをやめたが、まだ顔は怒りに満ちている。

しかし、だんだんと顔から血の気が引いていき、青ざめてゆく。

そしてもう1人の男は引き返していき、霧の中へと消えた。

取り残された彼は、踵を返し、森の中へ入っていった。

どのくらい歩いただろうか？

目の前に突如、開けた場所が現れ、奥には洞窟があった。

彼は何か得体のしれないものを感じ、帯刀していた剣　つるぎを抜いた。

警戒しながら、ゆっくりと洞窟の中に足を進める。

だがそこにはただ一つ、大きな石の扉のようなものがあるだけだった。

その扉の真中には、鳥のような不思議な紋章が彫られている。

彼はその扉に恐る恐る近づき、手を伸ばしす。

そしてその手が触れた瞬間、辺りは眩い光に包まれた・・・

「!!!!!!痛っ!!!」

「ひでぶっ!!」

そこで彼は目を覚ました。

そして勢いよく起き上がったせいで、彼を覗いていた男と頭が正面衝突した。

どうやら今までののは夢だったらしく、痛みで現実に取り戻された。そんな彼と同じように痛みでその場にうずくまる・・・それはロイドだった。

「どうしたんですかっ!?!」

ロイドの奇声を聞いたセシルが慌ててかけつけた。

「・・・な・・・なんでもないです・・・」

ロイドが涙目で答える。

「うっ……ごめん……」

同じく涙目で頭を押さえる少年。

「い……いいよ……覗いてた僕も悪いし……でも、もうちょっと起きるタイミング考えてよ……」

「それよりあなた、大丈夫？」

「あのおっ……僕の心配は……？」

セシルは痛がるロイドを半ば無視して少年に駆け寄る。

「あなた、名前はなんて言うの？」

「名前は……レイ……でもファミリーネームはわからない……」

「わからない……？じゃあどこから来たとかは？」

レイは必死に思いたそうとする。

しかし目を覚める前の記憶が一切わからない。
一体自分は誰で、なぜここにいいのか・・・

「君はその服を着てこの倉庫に倒れてたんだよ？」

痛みから復活したロイドが、脇の机に置いてある血だらけでボロボロの軍服を指差した。

「・・・全然」

「そう・・・記憶喪失なのかしら・・・あつ、私はセシル・クルーミーよ・・・そしてこっちがロイドさん」

「どお～もお～」

ロイドはヘラヘラしながらズイツと彼に顔を寄せた。

「あのさあ～、君、KMFの騎乗経験は？」

「・・・はい？」

「ロイドさんっ！」

「いいじゃない、この子がもしKMFのパイロットならそれがきっかけで思い出すかもよぉ？」

KMF・・・記憶はないが、なぜか操縦の知識だけは頭に残っていた。

そして悪びれもせずロイドは話を続ける。

「君が気絶してたときにいろいろ調べさせてもらっただけど、なかなかいい体つきだし、一回シュミレーターしてみない？」

「いいの・・・？」

もし自分がKMFのパイロットであつたなら、ロイドの言うように、記憶を取り戻すきっかけになるかもしれない・・・

「待つてくださいロイドさんっ！そんな誰かもわからない一般市民に「大丈夫大丈夫！主任は僕だし、いざとなったら責任もとるから」

そしてセシルの反対を強引に押し切り、レイのKMFシュミレーションは決定した。

1時間後
…

『どうレイ君？準備はいい？』

「いいですよ、M S・セシル・・・」

彼は黒のパイロットスーツに身を包み、シュミレーターのコックピットに座っていた。

操縦知識はあったが、念のために教本も読んだ。

するとそこにはM V Sやブレイズルミナスなどという見たことのない知識もあつたので、見ていて正解だな、と彼は思っていた。

おそらく新システムなのだろう。

2人に詳しく話を聞くとところによると、特別派遣嚮導技術部は、兵

・ 器の開発を目的としているのだから、当然と言えば当然なのだが・

『今回、レイ君が使用するナイトメア「Z-01 ランスロット」、私たち特別派遣嚮導技術部が開発した、世界で唯一の第七世代型KMFよ』

『まあつまりは僕の最高傑作ってこと』

セシルの通信にロイドが割り込む。

彼女は、いきなりこんなハイスペックな機体でシュミレートするなんて・・・と思いつつロイドを見たが、彼の顔にはそんな心配事は一切見えない。

そんなロイドを見た彼女は、諦めて話を続けた。

『では、今回のミッション内容を説明します。戦場は市街地を想定し、敵はサザーランドが4体、これを制限時間10分以内で撃破してください』

「りょーかい」

『レイくん、ここは「イエス・マイロード」って言ってもらわなきゃ気分がでないでしょ?』

「（シュミレートに気分は必要なのか・・・？）」「と思いつつ「今度から気をつけます」とロイドに返事をして、操縦桿を握った。

『では、これよりシュミレートを開始します』

セシルの合図とともにブザーが鳴り、敵のサザーランドが現れた。

「すっ・・・すごいですね・・・」

「おお・・・」

シュミレート画面を外で見ていたセシルとロイドはその様子に驚いた。

というのもほんの一瞬で勝負がついたのだ。

目の前に現れた4機のサザーランドの斉射を掻い潜り、大きく跳躍した後、ハーケンを飛ばしながら両腕に持っていたMVSを投げて4機全てを一瞬で沈黙させた。

制限時間は9分46秒も余っている。

「適合率92％・・・」

「でもスザク君には及ばないかあ」

セシルはその高い数値に驚き、ロイドは少し残念そうに言った。

『あの・・・これで終了・・・・・・・・？』

レイから通信が入る。

声からは物足りないといった雰囲気を感じ取られる。

「あなたがまだ続けたいなら続けてもいいわよ？」

『じゃあお願いします・・・・・・・・それと・・・・・・・・もっとレベルを上げてもらえると・・・・・・・・』

それをきいたロイドはなぜか笑いだし、セシルは何とも言えない顔をしていた。

「じゃあ一気に上げるわよ？」

『お願いします』

ミッションナンバー？

戦場：市街地

敵部隊：サザーランド28機、機動戦闘車54台

制限時間：50分

とシュミレーターのコックピットの画面に表示され、開始のブザーが鳴った。

それと同時にどこからともなく十数機のサザーランドが現れ、彼のまわりを囲み、アサルトライフルで撃つ。

しかしそれがランスロットに当たることではなく、右腕のハーケンで宙に飛びあがり、素早くそれを巻き上げると、正面にいた2機のサザーランドに再びハーケンを発射した。

すると見事二つとも命中し、そのまま地面に崩れおちたサザーランドに食い込んだハーケンを巻き上げると、勢いよく地面に降下し、脇にいた別の2機のサザーランドをMVSで真つ二つにする。

しかし、さらにその後ろから残ったサザーランドが銃弾を放ち、援軍として何十台もの機動戦闘車がランスロットに迫る。

それを見たレイはシールドで防ぎながら一度狭い路地に逃げ込み、サザーランドがそれを追いかける。

ランスロットはランドスピナーを使い、両脇のビルを昇っていくと同時に、MVSで側面を壊していく。

その下にいたサザーランドはアサルトライフルを上に向けるが、落ちてきた瓦礫に潰されてしまった。

追ってきた大半のサザーランドはがれきの下敷きになったが、まだ数機生き残っており、ランスロットはそれらに向けてハーケンを放

ち、無力化していく。

そしてその狭い路地からだと、待ち伏せしていたようにサザールンドがスタントンファをランスロットに叩きこむ。

だがそれをしゃがんで避けると、脚部をMVSで切り捨て、持っていたアサルトライフルを奪い、それでコックピットを打ち抜いた。

『すごいねえ、君』

突然ロイドが通信を開く。

「そうですか？まあ機体のおかげってのもあるんですけどね」

謙遜するレイだが、何故か笑顔である。

しかもロイドと会話しながらも次々とサザールンドや機動戦闘車を破壊していく。

彼は自分がこれほどまで出来るとは思っていなかった。

しかもこの機体は素晴らしい。

まるで自分の手足のように思い通りだ。

「フフフ・・・」

思わず笑い声が漏れる。

そして結局彼は全ての敵をノーダメージの中20分で無力化し、シユミレートを終えた。

「いやあゝ、君も最高だねえ」

シュミレーターから降りた彼にロイドが言った。

「お疲れ様、でも本当にあなたはすごいわ・・・でも軍のデータにあなただの名前はなかったのに・・・」

セシルは彼に飲み物とタオルを渡しながら不思議そうに言った。
確かに彼女の言うとおりだ。

こんなにもKMFの操縦知識があるというのに、それを扱うブリタニア軍の騎士のリストに自分はいないのだ。

「（じゃあなんで僕はこんなに・・・）」

レイはどれだけ考えても答えは浮かばなかった。

そして彼は考えることをやめた。

所詮ただの記憶だ。

ないと言って別段問題になるわけでもない。

それに彼は自分の生きる道を見つけた気がした。

シュミレーターとはいえ、あの戦場の高揚感・・・

相手を破壊するたび心地がよかった。

そして彼は決めた。

「Mr・ロイド・頼みがあります」

「ん？なんだい？」

「僕をここに置いてください」

「いいよ」

「早っ！！」

ロイドの即答に思わずセシルがつっこむ。

「いやあゝ、だって彼も優秀なデバイサーだし、今度新しい子が一緒に自作のKMFを持ってくるから丁度いいんじゃない？」

「えっ！？そうなんですか！？」

「言ってなかったけ？」

「きいてませんっ！！」

「あら失礼、ってことで君の身分はこっちでなんとかするから・・・
ひっ！ごめんなさいごめんなさいっ！」

あまりに適当なロイドについてセシルの堪忍袋の緒が切れ、ロイド
が目の前でボコボコにされていく。

レイはそれを見ながらこの先に大きな不安を抱えるのであった・・・

STAGE 02 【悪魔の目覚め】（後書き）

戦闘シーンって難しい…うん。

さあ今度はもう一人の男の子の登場です。

こっちの方はなかなかつかみどこのないキャラを目指したんですけど…

それになぜか2話より3話の方が先に下書きができちゃったんですよw

でわ、最後までご愛読ありがとうございましたw

（いや、完結じゃないですからねっ！？）

S T A G E 0 3 【レイの興味】（前書き）

誤字・脱字の指摘、お願いします

STAGE 03 【レイの興味】

「枢木スザクが捕まった……」

その知らせを聞いたロイドは半狂乱だった。

「せっかくの僕のパーツがあつ……！」と一日中言っているのだ。そのたびにセシルの笑顔の鉄拳制裁を受けるのが、ここ最近の日課となっていた。

レイは別に彼が処刑されようがどうでもよかったが、ロイドやセシルの話によると、彼の適合率は94%で、自分の92%より適合率が2%ほど良いらしい。

2%とは傍 へた から見たらたいしたことはないかもしれないが、70%から80%まで適合率を上げるなら、それこそ努力は必要だが、そこまで難しいことではない。

しかし、90%台に入っただとたん、1%でもそれを上げることは格段に難しくなる。

それは努力に加えて、その者自身の才能が必要になるからだ。

そしてレイは、自分より優秀な彼がどんな人物かということには少し興味がある。

そんなことを考えていた彼は、手に持っていたロイドに頼んで作ってもらった自分の戸籍の情報を、倉庫2階のブリッジの手すりに座って見ていた。

名前はレイ・チェスター。

自分ではなかなか気に入っていることは、ここだけの秘密だ。

「・・・ロイドちゃん！！枢木スザクに会いたんだけど、やっぱり無理？」

レイは何の躊躇もなく2階のブリッジから飛び降り、見事ロイドの前に着地する。

「・・・君よく骨折しないね」

「痛いけどね」

ロイドが落ちてきた彼にそういうと、レイは笑って答えた。

「まあいいんだけどさあ・・・面会は君じゃ無理だね、まだ正式に騎士公に任命されたわけでもないし・・・」

「そつかあ・・・残念だなあ・・・」

「あつ、でも今日、彼、護送されるみたいだから見ることはできるかもね」

ロイドは思い出したように言った。

「ふん・・・」

レイは一瞬心の中で、仮面を被って護送車を襲い、枢木スザクを強奪しようかと思ったが、あまりにも馬鹿馬鹿しかったので止めた。しかし本当にそんな馬鹿馬鹿しいことをやってのける人間がいるとは、その時の彼は知る由よしもなかった。

そして護送予定時刻
：

『ご覧ください・・・沿道を埋め尽くした人だかりを』

TV中継で護送の様子を実況するアナウンサー。
沿道は民間人の見物エリアとして開放されていた。
その道は下にモノレールが通っており、橋のような構造になっていた。

レイは後の方で来たため、後ろの方でぴよこぴよこしていた。

「・・・もつと早く来るべきだったなあ・・・全く見えないじゃん」

辺りをキョロキョロと見渡すと、道の両脇に橋を支えるアーチを見つけた。

しかたなくレイはまるで忍者のように軽々とアーチの天辺に登り、その上から見学することにした。

そして丁度その時、政庁の方から、周りをサザerlandで囲まれた護送車が現れた。

「へえ・・・あれが枢木スザクかぁ・・・」

護送車の上で、拘束具を着て、首に何やら装置を付けた少年が、2人の兵に銃をつきつけられて立っていた。
すると突然護送車とサザerlandが停止した。

「ん・・・？つてぐふおっ！！！！」

なぜこんなところで止まったのか不思議に思ったレイは、思わず身を乗り出して落ちそうになる。

それはさておき、護送車が進む方向から1台の白い車が走ってきた。どうやらあれはクロヴィスの御料車を模した車のようだ。

「（相当ふざけてるなあ・・・でもこれで面白くなりそうだ）」

レイはそう思いながらニヤリとした。

そして護送車の前で停止したそのブリタニア国旗の垂れ幕が燃え、そこには黒い仮面を被った人物が立っていた。

「私は・・・ゼロ」

仮面の人物は自らをそう名のつた。

そしてクロヴィスの葬儀の際にTVで何やら演説していた男・・・ジエレミアだっただろうか？

彼が空に1発、発砲するとナイトメアVTOL T4で空で待機していた数機のサザーランドが偽御料車を囲む。

だがゼロはそれに動じることはなく、手を高く掲げ、指を鳴らした。すると後ろの車装が真つ二つに割れ、その中から大きなカプセルが現れた。

それを見たジエレミアの表情は、驚き、恐れ、狼狽している。

なにやら相当危険な物らしい。

しかしジエレミアは勇敢にも射殺命令を出そうとするが、それを遮るようにゼロが口を開く。

「いいのか？公表するぞ・・・オレンジを」

その言葉に周囲の人々がざわつく。

「オレンジ・・・？なんかの暗号？」

レイもゼロが何を言っているのかさっぱりわからず、「（リフレインでもやってんののかなあ？）」と心の中で思っていた。

ゼロはそんな周りの声などまるで気にせず、運転手に合図を送り、車をゆっくりと前進させる。

「私が死ねば、公開されることになっている・・・」

「なっ・・・なにをっ・・・！？」

「オレンジ」という単語に全く心当たりのないジェレミアはただただうろたえている。

すると突然ゼロの仮面の左目の辺りがスライドして開いた。

「そうされたくなければ『全力』で私たちを見逃せっ！！そっちの男もだっ！！」

そしてその奥の瞳に宿った絶対遵守の力がジェレミアを支配した。
こうして後々の世まで語り継がれるオレンジの転落人生が幕を開けた。

「ふんっ！いいだろう！その男をくれてやれっ！」

「なっ！ジェレミア卿！！今なんとっ！？」

「その男をくれてやれっ！！誰も手を出すなっ！！！」

「どういうことだジェレミア！！そんなことは計画に「キューエル卿！！これは命令だっ！！！」」

ジェレミアの決定に他の純血派メンバーから抗議の声が上がる。

しかしジェレミアはそれらに有無も言わさない。

こうして枢木スザクは解放された。

そしてゼロは手に持っていたスイツチを押した。

するとカプセルから紫色の煙が噴出し、それを見ていた群衆はパニックになり、我先に逃げ出す。

その混乱に乗じてゼロとスザクと運転手は沿道から飛び降り、下で控えていたMR-1がハーケンを射出。

それにつけた布をクッションとして着地し、そのまま下のモノレールに乗り込んだ。

その間も純血派のメンバーはそれを必死に阻止しようとするが、それをさらにジェレミアに阻止されてた。

「いいねえ・・・じゃあ僕もっ・・・！」

その様子を見ていたレイは、そのモノレール目がけて飛び降りる。20mほど落下した彼は、見事モノレールの上に大きな音を立てて着地した。

どうやら中の彼らは気付かなかったようだ。

そしてモノレールは発進し、猛スピードで逃げるのであった。

【とあるゲッソー】

ゼロとスザクと運転手に扮していたカレン達が逃げ込んだのは、ゲッソー内のある廃劇場だった。

「まさか本当に助け出すなんて・・・」

「なんなんだ、あいつは？」

「馬鹿馬鹿しい！あんなハツタリが何度も通用するかってーのっ！」

その廃劇場の外で、扇グループのメンバーが口々に謎の仮面の男、ゼロについて話していた。

そしてそのグループのリーダーである扇要が口を開いた。

「しかし認めざる得ない・・・彼以外の誰にこんなことができる？日本解放戦線だって無理だ・・・少なくとも僕には出来ない・・・みんなが無理だと思ってい

たブリタニアとの戦争だって・・・やるかもしれない・・・彼なら」

それを聞いたカレンは思わず劇場の奥を振り返った。

彼は言った・・・やるなら戦争だ！と・・・

もし本当にそれを彼が成し遂げようとしているのだあれば、お兄ちゃんも・・・

そんなことを考えていたカレン達の会話の様子をを柱の影で見っていたレイは、そのままこっそりと劇場の奥へと入って入った。

「相当手荒な扱いを受けたようだな・・・」

その奥はゼロとスザクしかおらず、2人は話をしていた。

「やつらのやり口はわかっている、枢木一等兵・・・ブリタニアは腐っている」

なぜか彼が発した「ブリタニア」という単語には、とてつもない絶望が感じられた。
スザクはそんな雰囲気の前にも感じた覚えがあった・・・まるでルーシュみたいだ。

「君が世界を変えたいなら、私の仲間になれ」

「君は・・・本当に君がクロヴィス殿下を殺したのか？」

「これは戦争だ、敵将を打ち取るのに、理由があるか？」

「毒ガスは？民間人を人質に取って！」

「交渉事にブラフは付き物・・・結果的には、誰も死んでいない」

「結果・・・？そつか・・・そういう考えで・・・ふっ・・・」

なんとなく彼の考えがスザクにはわかった。

ますます彼はルルーシュみたいだな・・・だけどそんなことは流石にありえない。

そう思った彼は自嘲気味に笑った。

「私のところに来い・・・ブリタニアは、お前が仕える価値のない国だ」

ゼロがスザクに手を差し伸べる。

スザクは別に彼が嫌いではなかった。

しかし7年前に自分がしてしまった「罪」・・・

きつと彼のやり方は間違っているのだ。

僕にはよくわかる。

だから・・・

「そうかもしれない・・・でも、だから僕は価値のある国に変えるんだ！ブリタニアの中から！」

「へえ、あの子そんな風に思ってたんだあ」

レイはゼロとスザクの会話を影から見ている。

「ブリタニアを中から正しい方法で変える」

それが彼の理想なのだろう。

彼は別にそれを否定はしない。

理想とは欲望だ。

良くも悪くも人間を動かすための動力源なのだ。

「（まあ彼も面白いけど、今は・・・）」

そう思いながらレイはゼロへと目を向けた。

「ばっ・・・！馬鹿かお前はっ！！」

彼に背を向けてこの場を去ろうとするスザク。

ゼロ・・・いや、その仮面の下のルルーシュは、思わず怒鳴ってし

まった。

どうしてこんなにも彼はかたくなに自分を拒むのか。

昔はもっと自分主義のやつだったのに、今は他のイレブンや名誉ブリタニア人のために死ぬなどと言っているのだ。

「昔、友達にもよく言われたよ・・・この馬鹿って・・・」

スザクは懐かしそうに目を細める。

その言葉にルルーシュは思わず口を噤　　つぐ　　んでしまふ。

昔から馬鹿なところは相変わらず変わっておらず、彼の頭を悩ませる。

そしてスザクはもう一度その場で振り返った。

「君を捕まえたいが、ここでは返り討ちだろうからね・・・どうせ殺されるなら、僕はみんなのために死にたい・・・でも・・・」

スザクは再び歩き出す。

「ありがとう・・・・・・助けてくれて・・・」

「（・・・このつ・・・！馬鹿がつ！！！）」

ゼロはその様子をただただ唇を噛みしめながら見送ることしかでき

なかった。

「あゝららっ、ふられちゃったね？」

「なっ！！だれだっ！？」

そんなゼロの背後から突如声がした。

彼は驚いて慌てて振り返ったが、辺りが暗いせいで相手の顔は全く見えない。

だが声からしておそらく男だろう。

「・・・いつからそこにいた？」

「んっ？最初から」

なんなんだこのイレギュラーは・・・

ゼロは頭の中で混乱していたが、それを表に出すことはせず、あくまで冷静を装っていた。

相手はそんなことを知ってか知らずか、なにやら楽しげな表情を浮かべていた。

「あのテロリスト達の仲間ではなさそうだな・・・私を捕まえに来たのか？」

「捕まえる？まさかまさか！そんなつまらないことしないよ？」

男が白々しく答えた。

「……そうか……。だが、お前を生かしておく理由はない……死ね!」

ゼロは仮面のギミックを発動させると、絶対遵守のギアスを男に冷酷無慈悲な命令を下す。

すると男は急にうつむく。

そして・・・

「………ぷっ………ぷはっはっはっはっはっ
はっはっはっはっ……………! ! ! ! !」

男は死ぬどころか、その場で腹を抱えて笑いだした。

「（なっ……！！きかない……だっ……！！？）」

ゼロはその得体の知れない男に焦っていた。

この力は例え暗くて顔が見えなくても、遮るもののさえなければ効果

はあるはずなのだ。

「ぷっ！そんな『死ねッ！』なんて自信満々に言われても普通死なないよ？本当君って面白いね？」

どうやら男は笑いすぎて涙が出たらしく、手で顔をぬぐいながらゼ口に言った。

「くっ……！それでお前は何の用だ！？」

「えっ？いやあ、本当は枢木スザクに用があっただけど、この様子じゃきつと無罪放免で釈放だろうから今話す必要はないかな？つてね……それに

君も面白そうだし興味があるのさ」

「……いたいお前は……」

「さあね？自分で考えな　じゃあゼ口、またどこかで……」

そう言つて男は踵を返して、暗闇の中へ消えて行つた。

「（なんなんだあの男は・・・それにこの力・・・万能じゃないのか・・・？）」

ゼロは先ほどのイレギュラーについていろいろと考えていたが、あまりにも不明瞭なことが多いので、これ以上考えるのは無駄だと判断した。

それに可能性は低いがああ、あの男が今頃ブリタニア軍にこの場所を教えているかもしれないので、早々にこの場を後にすることにした。

【特別派遣嚮導技術部・倉庫】

ゼロとの初対面（互いに顔は見えないが）を終え、彼は「（面白いものを見つけたな）」と思いながら上機嫌で特派に戻ると、なにやらロイドも機嫌がよく、はしゃいでいた。

「あつ、お帰りレイ君」

最初に彼に気づいたセシルが笑いかけながら言った。

「ああゝ、おゝかゝえゝりいゝ！」

ロイドもセシルのおかげで気づいたようで、大手を振っていつもの調子で彼を迎え入れた。

「ただいま」

レイもニコニコしながら2人と挨拶を交わす。

「どうしたんだいロイドちゃん？やけに機嫌がいいね？」

だいたいの見当はついていたが、一応レイはロイドにきいてみた。

「ニュース見てないのかい？誘拐されていた僕のパーツが戻ってきて、無罪放免になりそうなんだあゝ！」

そういつてロイドは倉庫内をスキップし始めた。
それをレイは「あはは……」といった感じで見ているのであった。

「ところであなたは今まで何をしていたの？」

セシルはふとレイにきく。

「うん……ゼロとちょっとしたスキンシップ？」

「へえ、そうな……ってええーっ!!」

思わずノリツツコミを披露する彼女。

「君、ゼロに会ったのかい？」

ロイドも興味深そうにきく。

「うん、見た目通り、相当ふざけた人だったよ……でも頭の回転は速いね」

「捕まえようとは思わなかったの？」

セシルが少し不満そうにきいた。

「捕まえる？無茶言わないでよ、僕はまだ正式な軍の人間じゃないし、あそこにはゼロの仲間も大勢いたし、連絡しようにも携帯ももっていないからさ」

「そつ・・・そうね・・・」

セシルは納得したが、彼の本心は、面白そうだったからゼロを捕まえなかっただけで、あの場のテロリストを無力化するなんてことは彼にとっては容易いことだっただろう。

「まあそんなのどーでもいいんだけどさあ、いい加減彼女を紹介したら？」

「そうですね」

「彼女？」

「この前言ってたでしょ？新人の研究員のこと」

何故かセシルは嬉しそうに言った。

そして彼はこの前、彼らと出会ったときにロイドが言っていたことを思い出した。

「フラー君！」

「はい」

ロイドが呼ぶと、奥から1人の女性が現れた。

背は低く、赤茶色のボブカットで微塵のやる気を感じられないオレンジ色の瞳の女性は、上は薄い紫のハイネックに白衣を羽織り、下は白のミニスカートに黒いブーツといった格好であった。

「彼女は、この特派に新任で入った研究員で、フラー・ブレインハイム君」

「今日からあなたの飼育係をする羽目、兼、人間性に関しては全く無能な上司の部下になってしまったフラーです、よろしく」

「・・・飼育」

「無能って・・・」

おもわずレイとロイドが顔をしかめるが、彼女はそれを気にする様子もなく、レイに握手を求める。

一応彼はその握手に応えるのだが、その後、フラーがこっそり手を白衣の後ろで何度も拭っていたことに気づいたのであった。

STAGE 03 【レイの興味】（後書き）

なんか原作沿いすぎつまないですね…orz

なるべく原作のシーンは飛ばしてはいるんですけど。

今のところマオの辺りまで原作っぽくなっちゃいそうですね（汗）

そして今回はオリキャラ登場です！w

一回キャラ紹介とかってした方がいいんですかね？

そーいえばなんとこんな駄作の小説に感想を書いてくださった読者様がいらっしゃったんですよ！！w

嬉しくて「ぐへへ」って感じですよw

とゆーことで良彦様、感想ありがとうございましたw

そーですよね、「NMF」って…うつかりしました。

「KMF（騎士たる馬）」ですもんねw

とゆーことでぶん全て修正させていただきました。

これからも応援よろしくお願いします。

そして次回をお楽しみに！w

S T A G E 0 4 【過去と未来】（前書き）

誤字・脱字の指摘お願いします

STAGE 04 【過去と未来】

【トウキョウ租界・ショッピングモール】

ジルは1人歩いていた。

というのも、なにやらクロヴィス殿下が亡くなったとかで、午後の授業が中止となり、その暇を生かしてミレイが彼女に「部屋は決まったけど、まだ服とか小物とか日用品がないでしょ？これで好きな物を買ってくればいいわ」とたくさんのお金をくれたのだ。

本当はだれかについてきてもらおうと思ったのだが、シャーリーは水泳部で、ニーナはなにやら研究中。

ミレイは生徒会の仕事があり、ルルーシュは出かけている。

この前知り合ったカレンは病気で休んでるし、リヴァルは・・・なんとなく除外。

と言った具合で都合が合わなかったのだ。

まあなんとかなるだろうと思い、一日中租界内をぶらぶら歩きながら必要最低限の服と、その他諸々 もろもろ の美知用品を買い終わる頃には、午後の5時をまわっていた。

そしていろいろまわって疲れたジルは、公園のベンチで一休みしていた。

ちなみに今の彼女の服装は、ミレイが用意してくれたアシュフォー

ドの制服である。

長い銀の髪を後ろで1つにし、ラメの入った金色のシュシュでそれをまとめている。

そんな彼女の座っているベンチの両側には必要最低限の日用品とはいえ、大量の荷物が置かれている。

しばらくそのベンチでぼーっとしていると、ある意味、お約束である数人の不良たちが近づいてきた。

「ねえねえ君、今から俺たちと遊びにいかねえ？」

その中で、いかにも「ボス」といった感じの筋肉隆々でスキンヘッドの男がニヤニヤしながら話しかけてきた。

めんどくさいので無視していると「おい！きいてんのか！！」と男が怒る。

ジルはため息を1つ吐くと、その男ににこやかな笑顔をむけて言い放った。

「死にたいんですか？」

「……はい？」

男たちの声が揃ってきき返した。

彼女は有無を言わせぬ雰囲気を出しながら立ち上がり、笑顔を彼らに向け続ける。

「なっ・・・！ふざけんなよっ！？いいからこ・・・ぐわっ！？」

男はジルの腕を掴んで引つ張っていいこうとしたが、その手はすぐに
払われ、顔面に回し蹴りを食らった。

それを受けた彼は軽く5mは吹っ飛び、ノックアウトした。

「くくく・・・しっ、失礼しましたっ！！！！！！」

残った男たちはしばらく啞然としたのち、ノックアウトした男を抱
えてそそくさと逃げて行った。

ジルは再びため息を吐くと、ベンチに腰掛けた。

そして自分の手を見つめながら、最近起こったある出来事を思い出
していた。

それは夕食を作るルルーシュの手伝いのために、野菜を切っていた
時の話だ。

彼女は手が滑り、誤ってざっくりと人差し指を深く切ってしまった。
しかし驚くことにその傷は一瞬で治ってしまったのだ。

ルルーシュやミレイなどにそんなことも言えず、それが普通ではな
いことはわかっていたので、自分が恐ろしくなった。

それにこの年頃の少女としては異常な身体能力・・・

「はあ・・・」

本日3度目のため息を吐いた彼女は学園に帰ろうと立ち上がり、ふと思った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・どっちだっけ？」

人気のない路地を、拘束服を着た女性が、若葉色の髪を靡　なびかせながら歩いていた。

見た目は見目麗しい少女だが、どこか妖艶で、老成した雰囲気が漂っている。

そして彼女がその路地を抜け、目の前の公園をつきつて目的地に向かっていると、顔を伏せてベンチに座っている銀髪的女子学生が目に入った。

見たことのある顔に、思わず彼女は立ちどまった。

「まさか・・・・・・・・あれは・・・・・・・・」

彼女はそう呟くと、つかつかと歩み寄り「おい、お前！」といきなり声をかける。

「・・・あなたは？」

女子学生は顔を上げ、何やら怪しげなものでも見るような目つきで首を傾げる。

「私はC・Cだ」

「C・C？イニシャルだけ？」

「さあな・・・お前の名前は？」

「・・・ジルだけど・・・あなたは私が誰か知ってるの？」

ジルの目が一瞬で何かを期待したような目になった。

「まあ・・・ある意味仲間だ」

「仲間・・・？友達ですか？」

「いや、それは違うが・・・まさかお前記憶がないのか？」

「ええ・・・だからあなたが私について何か知っているのなら、どうか教えてくださいませんか!？」

ジルはC・Cの手を握り懇願する。

その顔は必死だ。

その様子にC・Cの心の中には知っているが故の苦渋が広がっていた。

「・・・・・・・・・・本当にいいのか?それがどんな結果だろうと・・・・・・・・」

C・Cはジルを見つめているが、その瞳からは感情は読みとれない。それを見たジルは一瞬ひるんだが、「かまいません」と力強く応えた。

「・・・・・・・・そうか・・・だがまずは奴のところにいかなくてはな」

「奴?」

ジルは目を細めてC・Cにきく。

「ああ・・・ところで、お前はなんでこんなところにいたんだ?」

ふと疑問に思ったC・Cはジルにきき返す。

「えっ！？あつ、えつと・・・それは・・・」

「・・・・・・・・まさか帰れなくなったのか？」

「・・・・・・・・」

ジルは無言でうつむいている。
どうやら図星のようだ。

C・Cは呆れたようにため息を吐いた。

「私もどうやらそこに用があるから一緒に行くぞ」

そう言つて彼女はスタスタと歩き始めた。

「えっ！ちよっ！待ってよっ！」

ジルは両側にあつた大量の荷物をひつつかむと急いで彼女の後を追いかけた。

その夜
：

ルルーシュは仮面を被り、ゼロとなり、護送されていた無実の親友、
枢木スザクを救出した。

そして彼を仲間に勧誘したが、上手くいかず失敗し、少し落ち込み、
うつむきながらクラブハウスへと帰宅した。

「ただいま・・・」

「おかえり、ルルーシュ」

「なっ！！」

「おかえりなさい、お兄様」

「その様子だと、食事は外で済ませてきたな」

帰宅したルルーシュは目の前の光景に一瞬で疲れが吹き飛び、驚きのあまり思考が停止した。

というのも、シンジユクで自分を庇って額を撃ち抜かれ、確かに死んだはずの女がナナリーと一緒に折り紙をしているのだ。

ルルーシュはその場にいたジルに「なんなんだこれはっ!？」といったような目を向けたが、彼女は首をすくめるだけだった。

「……………ジル……頼むから俺にわかりやすくこの状況を教えてくれ……」

「彼女はC・C、今日、私が迷子になったところを助けてくれた人・それにあなたに用事があるみたい」

「ふふっ、変わったお友達ですね？イニシャルだけだなんて」

ナナリーは楽しそうに笑い、ジルは何故か気難しそうな顔をし、C・Cは黙々と折り紙を折り続ける……

これは何かの嫌がらせなのか？と思わずにはいられないルルーシュ。このカオスな状況に頭が全く機能しない。

「ひょっとして、お兄様の恋人？」

「えっ・・・？」

そんな中ナナリーがルルーシュのある意味ピンチな状況を知ってか知らずか、無邪気に彼にきいた。

しかもＣ・Ｃが火に油を注ぐように、とんでもないことを口にした。

「将来を約束した関係だ・・・なっ？」

「はっ？」

Ｃ・Ｃの言っているいみがよくわからないルルーシュ。
そして何故かジルがニヤリとする。

「将来って・・・結婚？」

「ちっ！違うっ！違うって・・・そういうのじゃなくて・・・だから、その・・・彼女は冗談が「嫌いだ」」

「おめでとぅルルーシュ、式には呼んで頂戴ね？」

「なっ!?!」

ナナリーの誤解を解こうと必死になるルルーシュをC・Cはあっさり蹴落とす。

さらにはジルまでが彼の敵となってしまった。

「そうですか・・・お兄様が・・・意外と早いですね・・・」

「そうよナナリー、どうやら『お兄様』は彼女とベットの上で朝まで更なる愛を育みたいと仰　おっしゃ　っていますから、健全な私たちはお二人の邪魔にならないようにお暇　いとま　しましょうね?」

「・・・・・・・・はい」

とてつもなく悲しそうなナナリーの車椅子を押してニヤニヤしながら部屋から出て行くこととするジル。

「なっ!?!待て!?!間違っているっ!?!いろいろ間違っているぞっ!?!ジルっ!?!」

ルルーシュは「冗談じゃない!」といった顔でジルを必死に止める。すると真顔に戻った彼女は彼の耳元でささやく。

「わかってるわ．．彼女はあなたに会いたがっていた私の友達とでも言っておく．．．それに彼女、どうやら私のこと知ってるらしいの．．．だからナナリーを寝かせたら私も行くから、あなたはＣ．こと自分の部屋に．．．」

そう言い終えると、彼女はナナリーとリビングを出て行った。

「くっ！！とにかく来いっ！！」

２人が出て行った後、ルルーシュはＣ．Ｃの腕をひつつかみ、自分の部屋へとひっぱっていった。

そして彼はＣ．Ｃを半ば投げ捨てるようにベッドに座らせた。

「だれだお前は？」

「言っただろ？Ｃ．Ｃと」

「そうじゃなくて、お前は「死んだはず、か？」」

ルルーシュが一番気になる点はそこだった。
あの日、確かに彼女は自分を庇って死んだ。

しかも額を打ち抜かれたのだ。
普通なら生きているはずなどない。
だがC・Cはそんな彼などつゆ知らず、話を続けた。

「気に入ったか？私の与えた力は」

「やはり・・・お前が・・・」

「不満か？」

「いや、感謝してるよ・・・俺のスケジュールを大幅に前倒ししてくれたんだから・・・」

「スケジュール？」

「ブリタニアをぶっ壊す予定表さ・・・動きだせるのはもう少し先になると思っていた」

「壊せると思うのか？その力だけで」

「これがなくとも・・・やるつもりだった」

「見込み通り、面白い男のようだ」

「お前、これからどうする？軍に追われているんだろ？」

「軍と言ってもごく一部、なら普通に隠れているだけで問題はない・
・ここで我慢してやるよ」

そういつてC・Cは着ていた拘束服を次々と脱ぎ捨て、ベットに潜ってしまった。

「なっ！？ここに泊まるつもりかっ！？」

「男は床で寝ろ」

「そういうことじゃなく・・・」

「私が捕まったら、お前も困るだろ？じゃあお休みルル―シユ」

「待てっ！！まだ話は終わって」「そうですよ」「」

突然ルルーシュの言葉を遮ってジルが部屋に入ってきた。
彼女の右手にはナイフが握られていた。

「ジル!？」

まさかナイフを持つてくるとは思わなかったルルーシュは焦った。
だがC・Cは全く動じた様子はない。

「私にそんなもの「わかっています」」

ジルはC・Cの言葉も遮った。

「でも痛みは感じるでしょ? こう見えて拷問の知識は豊富なんですよ?。」

「なっ!？ジル、そんな知識どこで?・・・?。」

「それを今から彼女にきくんです」

ジルは冷たい目でC・Cを見下ろす。
それをみたC・Cは仕方ない、といった表情で、1つため息を吐くと、改めてベットに座りなおした。

ルルーシュはその様子を腕組みをしながら壁にもたれて冷や汗をかいて見ていた。

「・・・私は一体何ですか？」

ジルがきく。

「私も詳しくはわからないが・・・一度、クロヴィスの研究所で捕まっていた時にお前を見たことがある」

「研究所だと？」

C・Cの思いがけない答えに、ルルーシュが眉を寄せて言った。

「ああ・・・おそらくなんかの実験体だったんだろう・・・お前も心当たりがあるだろ？」

C・Cはジルを見ながらきく。

確かに心当たりはいくつもあった。

常人よりも傷の再生スピードが速く、身体能力も女の身体だというのに体力、筋力、瞬発力もはるかに凌　しの　ぐものがある。

それに記憶はないというのに暗殺術やKMFの操縦方法、拷問術、戦闘指揮に関する知識など、まるで戦うために作られたマシーンと

でもいえるほどのものを有しているのだ。

「そん．．．な．．．私．．．」

C・Cから自分の正体を聞いたジル。

彼女はあまりのショックのあまりナイフを落とし、その場にへなへなと座り込んでしまった。

そしてその目からは涙が溢れていた。

「ジル．．．」

ルルーシュはそんな痛々しい彼女をただ見ていることしかできなかった。

C・Cも無表情ではあるが、顔を背けている。

「私は．．．どうして．．．うう．．．」

自分という存在がわからない。

何のために生きているのだろうか？

記憶もなく親すら覚えておらず、今まで自分が生きていた幸せすら感じられない。

ただ他者を殺すために生み出された自分。

はたして生きている意味などあるのだろうか？

この世界で独りぼっちの気がした。
いや、きっと独りぼっちなだろう。

目の前が真っ暗で、何も見えない・・・
絶望だけが彼女を支配し、押しつぶす。

そのとき、先ほどまで持っていた自分のナイフが目に入る。
すると彼女はそのナイフをひつつかみ、自分の胸に向けて大きく振りかぶった。

「ジルっ！！やめろっ！！」

それを見ていたルルーシュは慌てて彼女の腕をつかみ、無理やり持っていたナイフを奪い取った。

「なんで止めるのよっ！！放っておいてっ！！！！どうせ私はっ！！
私はっ・・・！！」

「君は独りじゃないっ！！」

「！？」

ルルーシュはジルの両肩をつかみ、まっすぐ彼女を見据える。
ジルも思わず涙でぐしゃぐしゃになった顔を上げて、彼を見る。

「君は独りじゃない！俺も！ナナリーも！会長も！シャーリーも！リヴァルも！ニナも！カレンも君の味方だっ！」

ルルーシュの目は真剣だった。

そこで彼女は悟った。

彼も自分と同じだったのだらうと・・・

「・・・私は・・・自分の正体がなんであれ、覚悟はしていたつもりだった・・・だけど実際に向き合ってみると、そう簡単に『はい、そうですか』なんていかないのね・・・」

「それは人間として当たり前だ・・・むしろそう感じない人間の方がおかしい・・・誰も君を責めたりなんてしないさ・・・悪いのは君じゃない！ブリタニアだっ！！」

「ブリタニア」という単語を口にしたルルーシュは、どこか憎々しげだった。

「・・・俺も昔は君と似たようなものだった・・・全てに絶望していた・・・」

ルルーシュはジルから離れ、背を向けて自分の生い立ちについて語りだした。

「俺は元ブリタニアの皇子なんだ・・・」

「皇子・・・って・・・」

「ああ・・・7年前、俺の母親はテロリストの仕業に見せかけて殺されたんだっ・・・！」

彼は拳を強く握り締めていた。

「母の身分は騎士公だったが、出は庶民だった・・・他の皇女たちにはさぞ目障りだったんだろう・・・そして母は殺され、ナナリーは足と視力を失ったっ・・・！それなのに、あの男・・・ブリタニア皇帝は母の葬儀やナナリーの元にも顔を出さず、あまつさえ、当時、敵対していた日本に俺たちを人質として送ったっ・・・！」

ルルーシュの目は怒りと憎しみに燃えている。

そしてジルはそんな彼の話を無言で聞いていた。

「だがそんな日本でも俺たち兄妹にとっていいこともあった・・・今まで召使いや義兄弟に囲まれて育った俺に、初めて友達ができた・・・俺とナナリーはそいつと3人でささやかだが幸せな時間を過ごしていた・・・だがブリタニアはっ・・・！！！」

「日本に侵略戦争を仕掛けた・・・」

怒りに顔を歪めたルルーシュの言葉を、今まで傍観していたC・Cが引き継いだ。

「・・・そうだ・・・だから俺はその時悟ったんだ！ブリタニアがあつては、俺もナナリーも幸せにはなれないとっ・・・！だから俺は決意した！ブリタニアをぶっ壊すとっ！！」

彼は目の前にあつたチェス盤の上にあつた駒を怒りにまかせて手で薙ぎ払った。

そしてしばらく沈黙が続き、冷静になったルルーシュが口を開いた。

「・・・ジル・・・俺と一緒に来ないか？」

「えっ？」

ジルは突然の彼の言葉に驚いた。

「俺と一緒にブリタニアをぶっ壊さないか？」

ルルーシュはゆっくり、そしてはつきりとした口調で彼女にきいた。

「俺たち兄妹も、君も、このブリタニアという国に人生を狂わされた被害者だ・・・君には権利がある・・・戦う理由も今できただろ？」

「・・・あなたにそれができるの？」

「できるっ！！いや！！成さなくてはいけないんだっ！！せめてナリーだけでも幸せに暮らせる世の中を創るためにはっ！！」

彼の目は真剣だった。

普通に考えたら無謀な話だろう。

相手は世界の3分の1を占める超大国。

それをたかが現状、2人の人間が覆そうだなんて・・・

ジルにはどこからそんな根拠が湧いてくるのかわからなかったが、彼なら成し遂げる気がした

「それに、俺は力を手に入れた・・・」

「力？」

ルルーシュはニヤリと悪魔のような笑みを浮かべ、それを見た彼女

は背筋がゾクツとするのを感じた。

「ああ・・・そのＣ．Ｃのおかげだな・・・」

ジルがＣ．Ｃを見ると、彼女はつまらなさそうに自分の髪の毛をいじっていた。

「今その力を君に教えることはできないが、もし俺についてきてくれるなら、必ず君の望んだ未来を見せよう!!」

「未来・・・」

ジルはその言葉に心惹かれた。
自分が今一番欲しているもの
：
そして望んではいけないもの
：
だけど彼は宣言したんだ。

“未来を見せよう”と・・・
なら、自分が成すことは1つ。
そして彼女は決意した。

「・・・いいわ・・・ルルーシュ、私はあなたの騎士となりましょう・・・
・・・あなたやナナリー・・・自分の未来のために・・・」

「ありがとう・・・ジル・・・」

感謝の言葉を述べたルルーシュは彼女に優しく笑いかけた。

「っ！！／／／／」

するとなぜかジルの顔が真っ赤になり、彼に背を向けてその顔を隠した。

「じゃーじゃあ私はもう寝るわね！？泣いたら疲れちゃって・・・」

そう言っでジルはそそくさとその部屋から出て行ってしまった。

「・・・良かったのか？あんなにベラベラ話して・・・」

彼女が出て行き、2人つきりになった部屋でC・Cがルルーシュにきいた。

「・・・彼女があまりに不憫でな・・・まさかブリタニアの実験体 モルモット だったとは・・・」

彼は苦々しい顔で答える。

腹違いとはいえ、自分の兄弟がやったことなのだ。

ルルーシュも彼なりに責任を感じていた。

だがそれもクロヴィスを殺した自分への言い訳の1つでしかないな、とルルーシュは半ば自嘲的に笑った。

「・・・そうか・・・まあ私も気になることはあるしな・・・」

「・・・そう言えばC・・・最後に1つきいていいか？」

「なんだ？」

C・Cは眉をひそめて彼にきき返す。

「この力・・・通用しない相手もいるのか？」

「・・・お前の場合は1度使った人間・・・そして私だな・・・だがどうしてだ？」

「今日ゲッターで、この力を使ったが効かない人間がいた・・・」

「なら一度使った人間じゃないのか？」

「そうならいいんだが・・・そもそもまだこの力を手に入れて日は浅い・・・実験のために何度か使ったことはあるが、彼らはゲッターで会う可能性はあまりに低い人間ばかりだ」

「・・・それは私にもわからないな・・・じゃあ私は寝るぞ、疲れ
た」

そう言っただけで彼女は再びベットに潜りこむと、そのまま眠りについた。ルルーシュは今日起こった出来事をいろいろと考え、頭の中で整理をつけていたが、あまりにも情報が少なすぎるので考えをまとめられずにいた。

そして彼はそのうちに深い眠りに落ちていた。

STAGE 04 【過去と未来】（後書き）

はい、今回はジルのちよつとした過去のお話ですねw
そして今までよりちよつぴり長いですね。

そして自分の文才のなさに改めて乙ですorz
でもこんな駄文でも読んでくださる方がいるのならっ!!
と思いつつ書いておりました。

もし何か譜に落ちない点などがありましたら、ご質問いただければ
答えられる範囲で答えさせていただきます。

まあなんせご都合主義ですからそういう点は多々あるでしょう…w
そしていい加減キャラ紹介を書かなくちゃなあ、と思いつつ、なか
なかキャラがまだあまり定まっていませぬ…（汗）

できれば次回にはできるのよう頑張りますw
ではまたノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1377z/>

コードギアス 反逆のルルーシュ ～銀の翼～

2011年12月19日14時36分発行